

日本語教師養成のための授業研究 －模擬授業の省察レポートの分析－

稲葉 みどり

(日本語教育講座)

Analysis of Students' Reflection Reports for Microteaching Using KH Coder

Midori INABA

*Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education,
Kariya 448-8542, Japan*

要 約

本研究では、日本語教師養成のための授業で実施した模擬授業について、受講学生（実習生）がどのようなことを学んだかを考察した。この授業は、日本語教授法に関する理論と実践の基礎を養成することを目標としたもので、様々な外国語教授法についてグループで調べ、発表し、それを模擬授業の形で実演することを課題とした。ここでは、実習生が他の模擬授業の観察から学んだことに焦点を当て、自由記述による省察レポートの内容を分析し、その教育的効果を探った。分析は、KH Coder 3を使用したテキストマイニングの手法を用いて行った。頻出語の抽出、頻度別、品詞別の出現回数の分析、頻出語の共起ネットワークの検出、KWIC コンコーダンスによる前後の文や語句のつながりの調査等を通じて「学び」の内容を考察した。さらに、階層的クラスタ分析により出現パターンの似通った語の組み合わせから、実習生が学んだことを探った。その結果、実習生は、外国語教授法の特徴、教授法の応用方法、授業を構成する際の留意点、学習者への配慮、指導の進め方、教師の資質等に関して、初歩的、かつ、基本的な内容ではあるが、様々な知見を得たことが分かった。特に、学習者役になって授業を観察することで、教師としてだけでなく、学習者の立場から授業の構成を考えることの重要性への気づきを促したことが示唆された。

Keywords：日本語教師養成、模擬授業、外国語教授法、授業観察、共起ネットワーク

1. はじめに

本研究では、日本語教師養成のための授業研究である。ここでは筆者が2017年度に実施した現代学芸課程2年生を対象とした日本語教育コースの専門科目の授業を考察の対象とする。授業は、日本語教授法に関する理論と実践の基礎を養成することを目標としたもので、様々な外国語教授法についてグループで調べ、発表し、それを模擬授業の形で実演することを課題とした。本研究では、この授業の教育的効果を受講生の書いた省察レポートの分析を通じて明らかにする。

レポートのテーマは、「他のグループの模擬授業を見て学んだこと、気づいたこと、分かったこと等は何か（以下、「模擬授業を見て学んだこと」）」という設問に対する回答である。このレポートは、期末レポー

トの自由記述の設問の一つであるが、これを取り上げた理由は、90分16回の授業の中で受講学生（以下、実習生）が模擬授業を担当するのは、2回だけで、その他は他のグループの担当する模擬授業の実践を観察することになり、こちらの時間の方が長いからである。観察者の一部は、学習者役も担当することになっているので、レポートには、学習者の立場からの感想等も含まれている。

レポートの分析は、KH Coder 3 (Ver. 3a16; 2019/03/04) を使用したテキストマイニングの手法を採用する。分析から、頻出語を抽出し、頻度別、品詞別の出現回数からテキストの妥当性を判定すると同時に、学びの内容を考察する。また、頻出語の共起ネットワークを描画し、それらの語の共起関係からテキストの内容を探る。頻出語については、KWIC コンコーダンス

で前後の文や語句のつながりを調べ、「学び」に関わる内容をさらに詳しく考察する。最後に、出現パターンの似通った語の組み合わせにはどのようなものがあるのかを、Ward法の階層的クラスター分析により探索し、この実践が実習生にとってどのようなものであったかを明らかにする。

2. 先行研究

本研究は、同じ授業実践を扱った稲葉（2019）の続編である。稲葉（2019）では、当該の授業（模擬授業等）を通じて、どのようなことを学んだかを考察している。特に、実習生が他の実習生の行った模擬授業を観察して学んだことについて、「教壇技術」「学習目標等の設定」「教授法の特徴」「教材・教室環境」「学びの源流」の5つの観点から25項目の設問を教師が用意し、5件法で回答を分析し、その結果、1)「発問や応答の仕方」「声の大きさや話し方」等、教壇で実際にどのように振る舞うかに関心が高いこと、2)「学習内容の広さや深さ」「学習難易度の設定」等、学習内容の絞り込みやレベルの設定の方法等が参考になったこと、3) 様々な教授法の「短所」「長所」が理解できたこと、4)「座席の配置」や「学習・教室環境づくり」の方法等に発見があったこと、5)「自分が共感する点」や「自分とは別の見方」からより多くを学んだことを報告している。

本研究では、実習生の模擬授業の観察による学びをさらに詳しく追究するために、教師が予め作成した設問ではなく、自由記述による個人レポート（3.1参照）の内容を分析することにより、新たな知見を得ることを目的としている。

3. 研究の方法

3.1 授業の概要

この授業は、2017年度前期に開講した学部（現代学芸課程）2年生を対象とした専門科目で、日本語教授法に関する理論と実践の基礎を養成することを目標としている。様々な外国教授法についてグループで調べ、発表し、それを模擬授業の形で実演することが授業の課題である。こうすることで、その教授法の理念、特色、短所、長所等を主体的、協同的、体験的に学ぶことを主眼としている。また、他の実習生の発表や模擬授業の実演を観察し、ピア・フィードバックにより、新たな気づきや学び促すことをめざしている。

授業は、アクティブラーニングの理念を背景とし、協同学習の理念を援用したグループ活動で、2～3名を1グループとして進めた。90分16回の授業で、各自が15種類の外国語教授法の中から2種類の教授法を担当した。グループ構成員は必ずしも同じではない。

授業は、下記のⅠ～Ⅴの手順で進め、Ⅰ～Ⅴの中で示す4つの課題から構成されている。

- Ⅰ. イントロダクションでは、授業の目的と課題1～3の説明、取り上げる教授法の提示と担当・グループ分け、発表計画作成等を行った。（第1～2回目授業）
- Ⅱ. 教授法の紹介（課題1）では、グループによる概要（ハンドアウト）の作成・配布、教授法の紹介、質疑応答等を行った。さらに、模擬授業の方法とポイントの確認を行った。（第3～5回目授業）
- Ⅲ. 模擬授業の実施（課題2）では、授業者による模擬授業計画・指導案の作成・配布、授業の実演、質疑応答を行った。また、参観者はフィードバックシートを作成した。（第6～14回目授業）
- Ⅳ. 省察（課題3）では、教師が作成した振り返りの設問に5件法で回答した。内容は、模擬授業の自己評価、模擬授業実施、フィードバック等からの学び等に関する約200の項目である。（第15～16回目授業）
- Ⅴ. 省察レポート作成（課題4）では、教授法紹介、模擬授業実施、授業参観、フィードバックシートから学んだこと等を用意された設問に沿って各自レポート（個人レポート）としてまとめた。授業の課題はグループ活動であったが、レポートは個人の考えに基づいて書くよう指示した。

【表1】は、この授業で取り上げた15種類の外国語教授法である。

【表1】 授業で取り上げた教授法一覧

番号	教授法・アプローチ名
①	文法訳読法
②	オーディオ・リンガル・アプローチ
③	トータル・フィジカル・リスポンス
④	サイレント・ウエイ
⑤	コミュニティ・ランゲージ・ラーニング
⑥	ナチュラル・アプローチ
⑦	コミュニケーション・アプローチ
⑧	サジェストペディア
⑨	内容重視の教授法
⑩	協働言語学習法
⑪	タスク重視の言語教授法
⑫	段階的直接法
⑬	フォーカス・オン・フォーム
⑭	フォーカス・オン・ミーニング
⑮	ベルリッツ・メソッド

3.2 省察と個人レポートについて

本授業では、実践とともに省察も大切な授業の一部と考えている。模擬授業の実践後には、ディスカッションを行うと同時に、実践者に対して、書面（「フィードバックシート」と呼ぶ）にて授業の評価、感想、助言等のフィードバックを行った。これは、観察者が実践をより分析的に観るのを促す目的もある。さらに全ての模擬授業が終了した後に、授業全体の振り返りを実施した。振り返りは、教師の作成した設問に回答すること（稲葉，2019）、及び、レポートの作成である。

レポートの課題は、① 教授法の紹介をする活動（課題1）、② 模擬授業（教材作成を含む）を計画・実施する活動（課題2）、③ 模擬授業を実際にやってみて分かったこと、④ フィードバック（質疑応答・フィードバックシート）から学んだこと、⑤ 他の模擬授業を見て学んだこと、⑥ この授業全体の感想等、について自由記述の形式でまとめることである。

これらの中から、本研究では、「⑤ 他の模擬授業を見て学んだこと」という設問に対する自由記述の回答をテキストマイニングにより分析する。

3.3 KH Coderによる分析

レポート（テキスト）の分析は、樋口（2014, 2018）を参考に、KH Coder 3 (Ver. 3a16; 2019/03/04) を使用した。該当する部分のテキストをマイクロソフトエクセルファイルの各行に1件ずつ入力し、データファイルを作成した。それを読み込み、テキストから頻出

語を抽出し、次にそれらの語の共起関係を探った。自由記述データは20件（学生20人分）で、KH Coderを用いて前処理を実行し、文章の単純集計を行った。本研究では、この結果を基に、頻出語彙の抽出、共起ネットワークの描画、クラスター分析等を行う。

4. 結果と考察

4.1 使用語彙の分析から

最初に当該のテキストの内容の全体像がどのようなものかを探るために、KH Coderを用いて、使用語彙に関する分析を行った。ここでは、「模擬授業」「学習者」「教授法」「日本語教師」「日本語教育」「ハンドアウト」の6語、及び、【表1】の教授法名15語の合計21語を強制抽出する語として指定した。

分析の結果、当該のテキストには、段落数20、文数67が確認された。また、総抽出語数（分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数）は2,480、異なり語数（何種類の語が含まれていたかを示す数）は489であった。この中で、分析に使用される語（助詞や助動詞等のような文章にでも現れる一般的な語が除外された数）として360語が抽出された。

【表2】は、頻出語上位66語とその出現回数のリストである。共起ネットワークの描画（4.2）では、単語の最小出現数を3に設定して分析を行うので、ここでは、出現数が3以上の単語をリストに載せた。

【表2】 頻出語リストー上位66語（最小出現数が3回以上）

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	教授法	37	23	いろいろ	5	45	調べる	4
2	学習者	30	24	実際	5	46	理解	4
3	授業	24	25	準備	5	47	しかた	3
4	模擬授業	22	26	対象	5	48	グループ	3
5	感じる	16	27	伝わる	5	49	楽しい	3
6	教師	14	28	日本語	5	50	教材	3
7	思う	13	29	必要	5	51	経験	3
8	分かる	13	30	不安	5	52	言う	3
9	それぞれ	10	31	雰囲気	5	53	指導	3
10	教える	10	32	様々	5	54	重点	3
11	見る	10	33	一つ	4	55	深い	3
12	工夫	9	34	改めて	4	56	進める	3
13	レベル	8	35	学習	4	57	知識	3
14	学ぶ	8	36	今回	4	58	内容	3
15	自分	8	37	自信	4	59	年齢	3
16	特徴	8	38	受ける	4	60	発音	3
17	考える	7	39	重要	4	61	発話	3
18	行う	7	40	他	4	62	表現	3
19	難しい	7	41	多い	4	63	文法	3
20	生徒	6	42	対応	4	64	立つ	3
21	設定	6	43	大切	4	65	立場	3
22	発表	6	44	知る	4	66	話す	3

【表2】を見ると、一番多いのは、「教授法」37回である。続いて、「学習者」30回、「授業」24回、「模擬授業」22回である。これらの語彙は、この設問のテーマに関連した語句であり、多く出現していることから、このレポートの内容がテーマに沿って書かれたものであることを示している。よって、このテキストは、主旨に合ったテーマで構成されたものであると判断できる。

出現回数が多い動詞は、「感じる」16回、「思う」13回、「分かる」13回、「見る」10回、「学ぶ」8回、「考える」7回等の一般的な動詞である。これらは、設問の趣旨である「学んだこと、分かったこと」を回答するために用いられた可能性が高い。よって、省察が記されており、妥当な内容であると考えられる。

出現回数が多い名詞は、「教師」14回、「教える」10回、「レベル」8回、「特徴」8回、「生徒」「設定」「発表」6回である。これらは、模擬授業の実践に関連の深い語彙である。よって、記述内容的も目的に合ったものであると言える。

出現回数が5回以下の語彙として、「実際」「準備」「対象」「不安」「自信」「伝わる」等の授業の実演に関わる語彙が見られた。これらは、模擬授業を実際に行う場合の精神的な面を表す語彙と考えられる。また、「指導」「重要」「理解」「教材」「重点」「発音」「発話」「表現」「文法」「話す」等の学習や指導に関わる語彙も出現している。これらから、レポート（テキスト）では、模擬授業に関して、計画から実施までの広い範囲での考察が書かれていることが分かる。

以上、頻出語彙の分析から、レポートの内容は、模擬授業の実践や実践から学んだことに関して、教育的な観点から省察をする内容であることが分かる。その内容の如何はこれだけでは分からないが、本実践の大切な活動の一つである省察がレポートを通じて達成できたことを示している。

次に、【表3】（次頁）は、出現した単語を品詞別にまとめ、出現回数で降順に並べたものである。単語欄には、出現した単語を出現回数の多い順に並べて示してある。出現回数が3回以上、2回以上、1回以上の単語を示した。語数の多いものは、出現回数が3回以上のもの、出現回数が少ないものは、1回でも列挙してある。

ここでの品詞分類は、KH Coderのデフォルトの設定で、動詞・名詞のような内容語だけを分析の対象として扱っており、助詞や助動詞のような機能語は、対象から外れている。尚、この分類については、樋口(2017:39)は、動詞・名詞・形容詞・副詞については、ひらがなだけからなる語を「動詞B」のように「B」を付した品詞名に分類している。これは、ひらがなのみで構成される語については、どのような文章の中でも出現するような一般的な語が多く、文章の内容を反

映しないことが多いためである。そうした語をまとめて分析から省けるように「B」を付した品詞名を付与している。一方で「ない」のような否定をあらわす助動詞については、文章の内容に大きく影響する場合があるので、もともと「その他」品詞とせずに分析対象に含めている。最後に「名詞C」については、漢字一文字の名詞にこの品詞名を与えている。これは、以前から利用されている計量テキスト分析用のソフトウェアに合わせた、歴史的事情にもとづく仕様と樋口は説明している。

これを見ると、「動詞」が187回で、一番多い。内容を見ると、「感じる／思う／分かる／見る／学ぶ／考える／知る」等、何かを感じたり、考えたり、学んだりすることに関する語彙が多く見られる。よって、模擬授業において、多くの知見を得たことが示唆される。また、「教える／行う／調べる／言う／進める／立つ／話す」等の活動を表す語彙も多く見られることから、この実践が主体的、かつ、能動的に行われたことが分かる。

次に多いのが「名詞」の153回である。内容を見ると、「教師／自分／自信／グループ／知識／立場」等、教師や教えることに関わる内容が多い。また、「レベル／生徒／対象／年齢」等、学習者や学習環境等に関わる語彙も見られる。さらに、「特徴／日本語／雰囲気／教材／重点／内容／発話／文法」等、教育内容に関わる語も含まれている。よって、この実践で教師や日本語教育、学習者や学習環境、教材や教育内容等について考える機会が多く提供されたことが推測される。

続いて、「動詞B」の150回が多い。これらの動詞は、一般的に使われるものであるが、「する／できる／やる／ほめる／分かる」等の能動・可能や前向きの行動を表す語彙が見られ、ここでも実習生の学びや主体的な活動を裏付けられる。

「サ変名詞」は、127回である。「授業／工夫／設定／発表／準備／経験／信頼」等の授業の計画や目標設定、準備等に関わる語彙が見られる。また、「学習／対応／理解／指導／発音／表現／質問／正解／訂正／配慮」等、実践における学習者への配慮や対応に関わる語彙も含まれている。よって、この実践で、受講生は、授業計画と教壇実習の過程で、日本語教育の実践に関わる多くのことを体験した様子が窺われる。

最後に、「形容動詞」を見る。出現回数は、45回でそれほど多くはないが、「いろいろ／必要／不安／様々／重要／大切／おろそか／疑問／新た」等の語彙が含まれ、この実践においては、不安、疑問や疑問も多々あったが、同時に大切なことや新たな学びがあったことが推し量られる。

以上から、実習生に多くの学びを提供するものであったと考えられる。

【表3】品詞別の出現回数（降順）と単語

順位	品詞	出現回数	単語／（ \geq ）内の数字以上の出現回数の単語
1	動詞	187	感じる／思う／分かる／教える／見る／学ぶ／考える／行う／伝わる／受ける／知る／調べる／言う／進める／立つ／話す（ ≥ 3 ）
2	名詞	153	教師／レベル／自分／特徴／生徒／対象／日本語／雰囲気／一つ／自信／グループ／教材／重点／知識／内容／年齢／発話／文法／立場（ ≥ 3 ）
3	動詞B	150	する／ある／できる／なる／いう／でる／にる／やる／いる／ほめる／分かる（ ≥ 2 ）
4	サ変名詞	127	授業／工夫／設定／発表／準備／学習／対応／理解／経験／指導／発音／表現／客観／参加／質問／実感／実習／信頼／正解／訂正／配慮（ ≥ 2 ）
5	タグ	94	教授法／学習者／模擬授業／サイレント・ウェイ／ハンドアウト／ベルリッツ・メソッド／日本語教育／日本語教師（ ≥ 1 ）
6	形容動詞	45	いろいろ／必要／不安／様々／重要／大切／おろそか／疑問／新た（ ≥ 2 ）
7	副詞B	42	しっかり／より／どう／あまり／いかに／さらに／ただ／とても／まず／もちろん（ ≥ 2 ）
8	形容詞	33	難しい／多い／楽しい／深い／悪い／短い／良い（ ≥ 2 ）
9	否定助動詞	28	ない／ぬ（ ≥ 2 ）
10	副詞可能	27	それぞれ／今回／今後／時間／前／多く（ ≥ 3 ）
11	名詞C	23	他／身／人／声（ ≥ 2 ）
12	副詞	22	実際／改めて／全く／特に／本当に（ ≥ 2 ）
13	形容詞B	18	ない／いい／よい（ ≥ 4 ）
14	形容詞（非自立）	11	やすい／いい／づらい／良い（ ≥ 1 ）
15	ナイ形容	4	しかた／違い（ ≥ 1 ）
16	未知語	4	コミュニケーション・アプローチ／シミュレーション／モチベーション／ユーチューブ（ ≥ 1 ）
17	名詞B	1	した（ ≥ 1 ）

4.2 共起ネットワークの検出

頻出語彙がどのように結びついているかを探ることにより、テキストの内容を分析する。ここでは、KH Coderの「共起ネットワーク」コマンドを使って、出現パターンの似通った語（共起の程度が強い語と捉える）を線で結んだネットワーク図を作成し、語と語のつながりを可視化した。

分析では、最小出現数を3、描画数（描画描画する共起関係の絞り込み数）を60に設定した。【図1】は、対象となるテキストにおける頻出語の共起ネットワーク（「N 54, E65, D .045」）を検出した。出現数の多い語ほど大きい円で描画され、描画されている語（node）は、「媒介中心性」（それぞれの語がネットワーク構造の中でどの程度中心的な役割をしているかを示す；樋口, 2014:160）によって、濃い色ほど中心性が高くなることを示している。語と語を結ぶ線（edge）は、太く濃いほど共起関係が強いことを示している。nodeの数（N）は54、edgeの数（E）は47、密度（D）は.033である（「N 54, E47, D .033」）。密度（density）とは、実際に描かれている共起関係の数を、存在しうる共起関係（edge）の数で除したものである（樋口, 2014:159）。線上の数値は語と語の共起の強さを示す

Jaccard係数である。共起ネットワークの描画では語と語が付置されている距離ではなく、Jaccard係数で示されている。

【図1】を見ると、頻出語によるいくつかの連鎖が見られる。まず、「学習者」という語が、「模擬授業」「教授法」「授業」と線で結ばれている。さらに「分かる」「感じる」「学ぶ」などの語と結ばれている。ここから、模擬授業の実践と観察（学習者になることも含めて）で様々なことを学んだことが読み取れる。

また、「見る」という語は「他」と結びつき、「分かる」「考える」「知る」とも線で結ばれている。よって、他のグループの模擬授業を観察により、様々なことを考えたり、知ったりしたことが示唆される。さらに、「難しい」という語が「自分」「行う」「学習」「しかた」等の語と連鎖をしていることから、模擬授業の実践を行うのに何らかの難しさを感じたことが読み取れる。この他にも、「自信」と「不安」、「立場」、「教材」、「準備」、「知識」、「対応」等の語を含む連鎖が見られる。これらの連鎖は、どれも模擬授業の実践からの学びの概略を描いていると思われる。

が大切だ[S2]「模擬授業や教授法の説明／短所長所が分かった[S5]」という一般的な学びに関する記述が見られた。また、「他のいろいろな模擬授業／学習者の年齢やレベルに合った対応 [S7]」、「いろいろな教授法の実践／いろいろな教授法を混ぜて教えた方がいい授業になるのではないか[S13]」等の教授法に対する見方についての記述も見られた。よって、教授法に関して実践的な観点から知見を得たと言える。

また、「ハンドアウトの工夫や板書の仕方、話し方の工夫、授業の進め方／まだまだ工夫できることがある[S2]」等、教え方や進め方の改善点に気づいたことが分かる。「応用が難しいと疑問に思っていた教授法の実演／良い点を発見することができた[S5]」のように教授法への新たな見方に繋がったことを示す記述もあった。

さらに、「いろいろなやり方／いいところや使えそうなところを盗む機会になる[S6]」「テキストにイラストを入れる、生徒をほめる、学習者への声かけ／参考になる点が多々あった[S19]」等、実践者の工夫を観察することで具体的な指導法の参考になったという旨が記されていた。

最後に、「ユーチューブ／どのようにしたら楽しくて分かりやすい授業になるかを考えた[S14]」という記述があった。これは、模擬授業の観察ではないが、準備の段階で他の実践例をインターネット等で見て、実践の方法を探求していたことを示している。

次に「考える」という動詞について見る。実習生がどのようなことを考えたのかをテキストに沿って要約すると、「不安を授業では見せないことが大切である[S2]」「授業の雰囲気作りや学習者の性格を考慮する[S5]」「見て良い点を今後活かす[S14]」「良い指導案を作る[S19]」等が見られた。よって、実践がどのようにすれば成功するかを考えた様子が映し出された。

次に「学ぶ」という動詞について、何を学んだかをテキストから読み取る。具体例として、「様々な教授法がある[S1]」「教授法に関する知識[S2]」「教授法の長所[S5]」等の教授法そのものに関することが挙げられる。

「学習者のレベルや学習進捗状況をきちんと設定することの大切さ[S4]」「学習者の立場に立って考えることの重要性[S9]」「丁寧な授業の準備の必要性[S12]」等の実践上の留意点に関するものも見られた。授業で苦戦する経験から新たな発見や気づきがある[S8]」等の記述もあった。

また、動詞「知る」についても、「質疑応答を聞いていて重要なことを知ることができた[S2]」「教授法の長所短所[S5]」「教授法の特性[S5]」等、類似の記述が見られた。

さらに、共起ネットワークのいくつかの連結の中心的な語である「教材」「立場」「難しい」「改めて」等

の動詞以外の語についても見てみる。

まず、「教材」については、「配布教材が必要な教授法は少ない[S8]」「教材をうまく作れるかどうかを理解のしやすさに影響する[S15]」「教授法によって向き不向きの対象、レベル、教材等がある[S20]」等、教材の実用性に関わる記述も見られた。

「立場」については、「学習者の立場に立って考えることができた[S9]」「教師という立場で自信をもった態度で授業をする[S10]」「学習者という立場から感じることができた[S14]」等、授業を構成する際、学習者の視点からの配慮が必要であることに気づいたことが示唆された。

「難しい」については、「はじめは実践が難しいと思われる教授法もあった[S5]」「一つの教授法に頼って授業・言語学習を進めていくのは難しい[S8]」等、教授法自体の実践の難しさに関する内容、また、「どのように教えるかを決めることは難しい[S5]」「定着の確認作業が難しい[S2]」「学習者への対応が難しい(客観的に見て分かった)[S3]」「学習者のレベルと教授内容、教師の話す日本語を対応されていくのが難しい[S9]」等、授業を行う上での難しさに関する内容が見られた。

さらに、「一から全て設定して授業を作ることは難しいが面白い[S20]」のような記述もあった。よって、実習生は難しさを感じながらも指導方法等について考えたことが分かる。

「改めて」に関しては、「学習者への対応の難しさを改めて客観視して実感した[S3]」「些細な言葉かけでも学習者のやる気に繋がるのが改めて分かった[S7]」「改めて教室の雰囲気作りが大切なことが分かった[S9]」「きちんと考えられていない授業は疑問が生まれ、受ける側も不安になることに改めて気づいた[S19]」等、教室での振る舞いについて考えたことが示唆された。

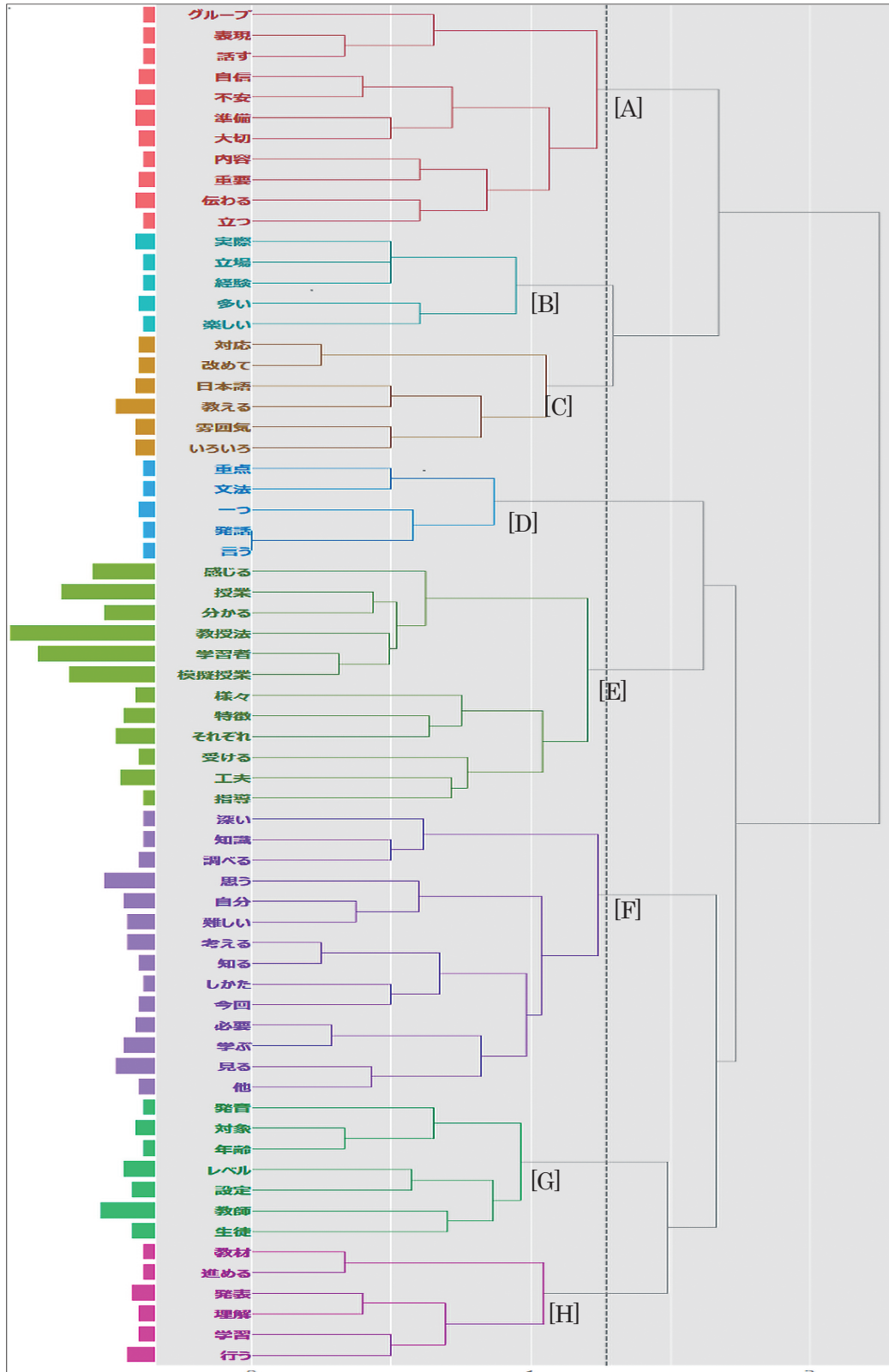
最後に、共起ネットワークの描画では、一番大きな円になっている「学習者」という語について見る。まず、「学習者のレベルや年齢に合わせた教授法[S5]」「学習者のニーズに合わせた指導[S1]」「学習者のレベルに合わせた目標設定[S4]」等、学習者に適した教授法の選択や指導法を考えることの大切さについての記述が多い。また、「学習者への対応[S3]」「学習者の間違いの訂正[S3]」等、授業中の学習者への対応に触れ、その難しさを記述した事例も見られた。さらに、「学習者との信頼関係[S2]」「学習者の目線に立つ[S18]」等、学習者への配慮の大切さについて述べた事例も見られた。これらの多くは、すでに上述の分析で取り上げた内容の多くと重複するものである。

5. 階層的クラスター分析

ここでは、出現パターンの似通った語の組み合わせにはどのようなものがあるのかを、Ward法の階層的クラスター分析により探索し、この実践が実習生に

とってどのようなものであったかを考察する。

【図2】は、対象とするレポートのテキストに階層的クラスター分析を行った結果を示すデンドログラム（樹形図）である。これを見ると、大きく[A]から[H]の8つのクラスターが見てとれる。



【図2】 レポートの階層的クラスター分析によるデンドログラム

[A]の語群からは、グループでの模擬授業を観察し、準備の大切さ、内容が伝わりやすさの重要性、自信や不安が学習者に与える影響等について考えたことが窺える。[B]からは、実際に教師や学習者の立場を経験することができたことが分かる。[C]からは、日本語を教える際の学習者への対応について考えたことが明らかになった。

[D]からは、文法や発話等、教授法によって重点が異なることを知ることが示唆される。[E]からは、様々な教授法の特徴（短所・長所等）、学習者に相応しいものを選択すること、実践では工夫すること等が必要なことに気づいたことが窺える。[F]からは、観察を通して、教授法や実践の方法について多くの観点から考え、大切なことを学んだことが示唆される。

[G]からは、授業を構成するにあたっては、年齢、教師資質等を考慮し、学習者のレベルに合った目標の設定の大切さを確認したことが窺われる。[H]からは、発表（模擬授業）を見て、それぞれの教授法をどのような手順や教材を用いて進めるかを理解できたことが示唆される。

6. まとめ

以上、本研究では、模擬授業に関して、実習生が他の模擬授業の観察から学んだことに焦点を当て、自由記述による省察レポートの内容の分析から、その教育的効果を探った。分析は、KH Coder 3を使用したテキストマイニングを用いた。

まず、頻出語彙の頻度別、品詞別の出現回数の分析から、レポートの内容は、模擬授業の実践や実践から学んだことに関して、教育的な観点から省察をする内容であることが分かった。これから、本実践の大切な活動であり目標の一つである省察がレポートを通じて達成できたことを示唆している。

頻出語の共起ネットワークの描画からは、模擬授業に関するいくつかの連鎖が検出された。「学習者」という語と「模擬授業」「教授法」「授業」等の連鎖や「分かる」「感じる」「学ぶ」などの語同士の連鎖から、模擬授業の実践と観察（学習者になることも含めて）で様々なことを学んだことが読み取れた。また、「見る」という語と「他」の連鎖、及び「分かる」「考える」「知る」の連鎖から、他のグループの模擬授業の観察により、様々なことを考えたり、知ったりしたことが示唆された。この他、模擬授業の実践からの学びの概略を描いていると思われる連鎖が見られた。

学びにつてさらに詳しく追究するために、これらの頻出語について、KWICコンコーダンスによる前後の文や語句のつながりを分析した。その結果、教授法の特徴、指導上の工夫、指導で教師の側が留意する点や教師が備えるべく資質、学習者の心理や動機付け等に

関して熟考したことが読み取れた。また、学習者役になったことから分かる記述も見られた。階層的クラスター分析からも類似の内容が浮かび上がった。

ここで、取り上げられた学びの内容は、日本語教師養成においては、初歩的、かつ、基本的な内容ばかりではあるが、入門期の実習生が教壇での実践を通じて得た大切な知見である。特に、学習者役になって授業を観察することで、教師だけでなく、学習者の立場から授業の構成を考えることの重要性への気づきが促されたことは、授業観察による学びの教育的効果であると考えている。

謝辞

本稿をまとめるにあたって、本授業の資料を研究に使用することを快諾して下さいました学生の皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

注

*[]内は、データベースとなるレポート（テキスト）の識別番号を示す。

参考文献

- 稲葉みどり (2019). 「日本語教授法の理解と実践力の育成－模擬授業の観察を通じて実習生が学んだこと－」『教養と教育報』17, 1-19. 愛知教育大学.
- 樋口耕一 (2014). 『社会調査のためにお軽量テキスト分析』ナカニシヤヤ出版.
- 樋口耕一 (2017). 「言語研究の分野におけるKH Coder 活用の可能性」『計量国語学』31-1, 36-45.

(2019年9月24日受理)